

多様な読みの実現

—「緑のカイ」—

「緑のカイ」は、すでに児童文学の世界では「朝はだんだん見えてくる」等で評価の定まった岩瀬成子の作品である。主人公の少女麻智は何年も前、空き家のプールの水の底に潜む「緑のカイ」と話すようになった。カイは全身緑色で、触ることはできない。大きくなったり小さくなったりする。そして何より、麻智にしか見えないのだ。

麻智がカイに会いにプールに行かなくなっておよそ二年半がたった今日、麻智は夜の商店街でカイに会った。

「ずっと待っていたのに。とうとうおれを忘れちゃったんだ。」

「おかげで、おれはこんなになっちゃった。」

「緑のカイ」は現実と非現実が交錯する不思議な物語である。それは、「羅生門」の非現実とも「山月記」の非現実とも違う、いわば不思議なりアリティのある非現実である。プールの底に潜む「緑のカイ」とは何か。読者はまずその疑問から思索をめぐらさざるを得ない。

授業ではその疑問を教室全体で共有することができる。そして、正解・不正解の枠を超えて、カイという存在について語らざるを得なくなる。

「緑のカイ」は、生徒に口を開かせ、多様に読むことを許容する作品である。口を開いたところから、読みの楽しさを味わわせたい。

(三浦)

白文  
訓読文  
書き下し文

漢文の白文を読むことは、学習指導要領では求められていない。漢文の白文を読むことは、実は中国語、しかも中国語の古語を読むことであり、国語科で外国語教育をする必要はないということであろう。

訓読文は、その約束にしたがって声に出して読めば、日本の古語である。その声を文字化すれば、書き下し文になる。読み下し、書き下してはじめて「国語」になる。

『明解国語総合』では、漢文学習に徹底して書き下し文を付した。というより、書き下し文に訓読文を付したと言ってもいいところがある。なぜか。

漢文の学習は、日本漢文を除けば、基本的に翻訳文学という学習材の学習だからである。その翻訳が、古語であるにすぎない。あくまでも「国語」として学習するのであり、中国語ではない。だとすれば、その学習は、

- ・ 翻訳文学としての享受
- ・ 漢文訓読体という古語の学習
- ・ 中国語を読みこなすという日本語の歴史の学習

という三つの柱で構成されることになる。漢文の内容や文体の楽しさ・すばらしさを前面にまず出そうとすれば、書き下し文で十分その目的は達成できる。

後は、生徒の実態に応じて、中国語をなんとか読もうとした先人の工夫にどこまで迫らせるかということである。

(三浦)